

紀元二千六百年（昭和十五年）

この年は「皇紀二千六百年」に当たるといっているので、既に1935年から祝賀行事の計画がたてられてきた。

そして、十一月十日から数日間、東京はじめとして全国で、記念祝典や行事が繰り広げられた。

既に、所謂「近衛新体制運動」をきっかけに政党・労働組合を解散し、ナチス張りの一党独裁の体勢が構想されて、国内の政治体制は一変した。

結局は政府の補助機関的な「大政翼賛会」が生まれたに過ぎなかったが、町内会・部落会・隣組・隣保班が組織されて、国民の生活は、政府の指示・指令によって簡単に動かせる態勢が整えられた。

世界情勢は、ナチスドイツのフランス占領をはじめ、全欧州の支配への「電撃」戦は、陸軍を完全に幻惑した。

近衛内閣は、九月日独伊三国同盟に調印、米英との対立は決定的なものになった。

さらに、フランス領インドシナ北部に軍隊を進め、単に中国に対する物資援助の道を遮断すると言うだけでなく、来るべき東南アジアに対する軍事侵略の前進基地を確保する、という意味を持っていた。

記念行事が終わると、国民は否応なしに、より大きな戦争のために全力を挙げるための力を強制されて行くのであった。

紀元二千六百年記念祝賀旗行列

これ以後、女学生の服装は『もんぺ』着用になった。

